



SCB

ニュース&トピックス

No.2024-38

(2024.6.17)

信金中央金庫 地域・中小企業研究所

上席主任研究員 藁品 和寿

03-5202-7671

s1000790@FacetoFace.ne.jp

中小企業の事例から見る「環境経営」①

— 菱和建设株式会社（岩手県盛岡市）の「グリーン」への挑戦 —

ポイント

- 「脱炭素」への機運の高まりを踏まえ、シリーズ・レポートとして、「環境経営」に果敢に挑戦して、さらなる飛躍を図る中小企業の事例を紹介するものを発行する。個社の事例をニュース&トピックスにて紹介するとともに、今後、複数社の事例をとりまとめた産業企業情報を発刊していく予定である。
- 今回は、岩手県盛岡市に本社を置き、建設業界において率先してSDGs経営に取り組む菱和建设株式会社の事例を紹介する。同社は、環境面において、人的・金銭的負担を伴いながらも“社会貢献のための資産運用”として、保有する山林での植林活動を通じたCO₂除去に取り組んでいる。

1. はじめに

信金中央金庫は、中期経営計画『SCBストラテジー2022』において、信用金庫業界独自のグリーン戦略を通じて「信用金庫＝グリーン」のブランドイメージの定着を企図し、2021年9月から、「しんきんグリーンプロジェクト」を推進している¹。この一環として、2023年8月から、国立大学法人神戸大学経済経営研究所との間で、中小企業の脱炭素経営にかかる実態や課題を調査・研究し、学術的観点から、より実効性の高い脱炭素化支援策を検討するとともに、研究成果を広く発信する目的で、共同研究に取り組んでいる²。また、信金中央金庫 地域・中小企業研究所では、産業企業情報 No.2022-1³（2022年4月19日発行）を皮切りに、「脱炭素」をキーワードとした題材で、随時、情報発信を継続してきた⁴。

こうしたなか、本稿では、環境面において保有する山林での植林活動を通じたCO₂除去に取り組み、かつ本業の面ではSDGs経営の先駆け的な取り組みを実践する等、果敢に挑戦している中小企業の事例を紹介する。

なお、本稿作成に際して、菱和建设株式会社 専務取締役 照井輝樹様、管理本部 総務部 課長 佐藤貴浩様に取材をさせていただいた。貴重なお時間を頂戴したことに、この場をお借りしてお礼申し上げたい。

¹ 信金中央金庫ホームページ (<https://www.shinkin-central-bank.jp/investor/plan/>) を参照

² 信金中央金庫ホームページ (<https://ssl4.eir-parts.net/doc/8421/announcement/90897/00.pdf>) を参照

³ 信金中央金庫ホームページ (<https://www.scbri.jp/reports/industry/20220419-1-5.html>) を参照

⁴ 信金中央金庫 地域・中小企業研究所ホームページ (<https://www.scbri.jp/>) において、「産業企業情報」ならびに「ニュース&トピックス」を中心に検索、参照願いたい。

2. 菱和建设株式会社の「グリーン」への挑戦

(1) 企業の概要

同社は、創業から62年目を迎える、土木・建築工事業を主業とする総合建設業者である（図表1）。政治や社会の動向等で事業環境が厳しくなる中、「土木・建築工事一本」を貫き、一切ぶれずに事業に邁進してきた。社名の由来について、1962年2月に8名の有志で重機土木の会社を創業するにあたり、信用を得て安価で重機の提供を受けたキャタピラー三菱（株）（現・日本キャタピラー合同会社）への敬意を表していただいた「菱」と、有志8名の「和」を組み合わせ、「菱和建设」と命名した。なお、メインバンクは創業以来、一貫して盛岡信用金庫（岩手県盛岡市）であり、同金庫の青山町支店新築工事（図表2）を請け負う等、“二人三脚”で歩んできた。

（図表1）企業の概要

代表者	海野 尚
本社所在地	岩手県盛岡市
主力業務	土木一式、建築一式、大工左官、とび・土工、石、屋根、管、タイル・レンガ、鋼構造物、鉄筋、舗装、しゅんせつ板金、ガラス、塗装、防水、内装仕上、熱絶縁、建具、水道施設、解体
従業員数	100名
設立年月	1962年2月
資本金	25,000万円



（備考1）写真は、取材に応じていただいた専務取締役 照井輝樹様（右）、管理本部 総務部 課長 佐藤貴浩様（左）

（備考2）同社ホームページ等をもとに信金中央金庫 地域・中小企業研究所作成

（図表2）盛岡信用金庫 青山町支店の新築工事

① 外観



② ぬくもりのある内観



（備考）盛岡信用金庫提供

同社は、2016年7月、岩手県の建設業界では初めて、若者応援企業として、完全週休2日制を導入した。また、建設業界全体の大きな課題である“建設業従事者の高齢化”の解決に向けては、率先して健康経営の取組みを外部に発信し、経済産業省による認定

制度「健康経営優良法人⁵」の中小規模法人部門においては、2021年から2年連続で、上位500法人にあたる「ブライツ500」に認定されている。ISO9001（品質）やISO14001（環境）の認証を取得したほか、2022年1月には、SDGs宣言書（図表3）を公表した。公表にあたっては、特段の動機づけはなく、同社として「（時代の流れから）当たり前のこと」として取り組んだという。

こうした常に昇華しようという経営姿勢の背景として、「我々は、社会、会社、社員を共に発展させる接点を求める」という経営理念の存在が挙げられよう。この根底にある「三方よし」の考え方が、創業者から代々引き継がれ、歴代社長が「社員を路頭に迷わせたくない、そのために会社を盤石強固なものにしたい」という強い信念で経営に取り組んできたことで、“地元にとって必要不可欠な会社”の地位を脈々と築いてきたといえる。

社員教育では、先輩社員から若手社員への知識や経験の継承、さらには社史の周知や理念の浸透、OJTの再構築を目的に、企業内学校として「菱和アカデミー」を運営している。スマートフォンやPCから社員制作のオリジナル動画で学習できるWEB講座であり、「土木」、「建築」、「営業」、「事務」それぞれの現場に応じた学習機会が提供されている。また、社員の愛社精神をさらに高めるため、社歌「光路」を作成している。

さらに、建設業としての堅いイメージを払拭する観点から、イメージキャラクター「りょーわん⁶」（図表4）を制定し、2020年にはイメージソング「輝く明日へ～Tomorrow to shining you～」を作成している。こうした取り組みは、自社だけではなく、地元の建設業全体のイメージアップも意識したものである。

（図表3）「SDGs宣言書」



（備考）同社提供

（図表4）イメージキャラクター「りょーわん」



⁵ 詳細は、「ACTION! 健康経営」ホームページ (<https://kenko-keiei.jp/>) を参照

⁶ プロフィールは、性格: 明るい・勇敢、チャームポイント: 水色の鼻、好きな食べ物: わんこそば、口癖: ~だワン!、特技: ダンスである。

(2) 「グリーン」への挑戦

30年ほど前の雫石町国見山リゾート整備計画への参画をきっかけに、1996年12月、同業者から、岩手郡雫石町にある約6,000坪（約20,000㎡）の山林を取得した。及川力・元社長は「これからは脱炭素の時代である」という強い信念で、2008年6月、当時の社員一同で、取得した山林を「菱和の森・和光の森」として大規模に整備した⁷。今までの杉苗の植林本数は4,800本以上に上り、継続的に植林活動に取り組んでいる（図表5）。また、「和光の森」の名称の由来となっている児童養護施設・和光学園（岩手県盛岡市）との交流の中で、10年以上、子どもたちに「自然の楽しさ」を体験してもらう活動も続けている。植林活動にかかる間伐や下草刈り等の維持作業には、人手の負担とともに、年間数百万円に上る費用負担もあり、生半可な気持ちでは取り組めない。それでも、山林を売却する予定はなく、“社会貢献のための資産運用”との位置付けで、覚悟を持って臨んでいる。植林活動によるCO₂吸収量は年間67,200kg-CO₂（50年生杉の換算値基準）で、この吸収量を今後も維持していきたいと意気込む。

（図表5）植林活動の風景

① 植樹会（2008年）



② 整備後の「菱和の森」（2024年）



③ ブルーベリー栽培（2023年）



④ 子どもたちの体験学習（2018年）



（備考） 同社提供

⁷ 山林の管理は、子会社である(株)菱友が担っている。

本業の土木事業では、自然との共生をコンセプトに、ほ場（農地）整備に取り組んでいる（図表6）。1962年に岩手県が県産米の増産を強化した当時から、同社は、いち早く各種機械を用いた田んぼの土地改良事業に取り組み、田んぼを整備する高い技術を伝承してきた。この高い技術は、現在に至るまで事業基盤の一つとなっており、同社の“強み”となっている。

（図表6）ほ場（農地）の整備（星山・犬吠森地区第10号工事）



（備考）同社提供
 そのほか、環境目的の活動として、環境ボランティア活動（国道46号歩道清掃、公園樹木剪定等修繕等）への積極的な参加、本業では完成工期の短縮化による環境負荷の低減、社員向けには“ノー残業デー”の実施や累計代休取得率100%の達成等に取り組んでいる。また、直近では、60周年を機に、制服をリサイクル可能な素材に切り替えている。

3. おわりに

同社の経営では、いかなる状況下でも「ブレない」がキーワードのようである。また、SDGs経営や環境経営の実践では、「当たり前」がキーワードであり、例えば植林活動では人的・金銭的コストがかかるにもかかわらず「社会貢献のための資産運用」と位置付ける等、覚悟を決めて取り組んでいる姿勢は大変に印象的である。

同社は、「100年企業」を目指している。社員一人ひとりが謙虚にまじめであることを大切にし、「縦割りにならず、社員全員で補い合いながら利益を生み出していく働き方」を実践しながら、社員一丸となって「エクセレントカンパニー」の実現に向けて邁進している。

以上

本レポートは発表時点における情報提供を目的としており、文章中の意見に関する部分は執筆者個人の見解となります。したがって、投資・施策実施等についてはご自身の判断をお願いします。また、レポート掲載資料は信頼できると考える各種データに基づき作成していますが、当研究所が正確性および完全性を保証するものではありません。なお、記述されている予測または執筆者の見解は予告なしに変更することがありますのでご注意ください。